

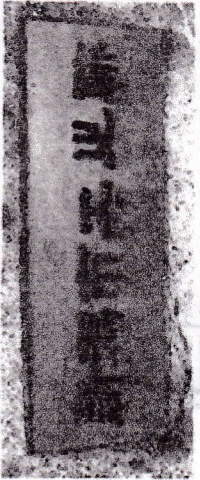
よみがえり、下町

下町の活力をつくらせた高校

新潟市立工業高等学校

〔旧北部コミュニティセンターの跡地は、旧市工の跡地です〕

旧北部コミュニティセンターの跡地が売却され、新しい動きが始まりました。建物の解体が始動し、そこに「新潟市工の跡」と書かれた石碑を発見し、下町地区で唯一の高校が存在した事を示す証拠でした。



市工の始まりは、新潟市。昭13年に機械工養成所を設け、市内の鍛冶所に鍛冶生を送り出していました。工業産業に力を入れた時代に新潟市立の工業学校を求め動きがありました。不況であり財政難で見送られてきました。

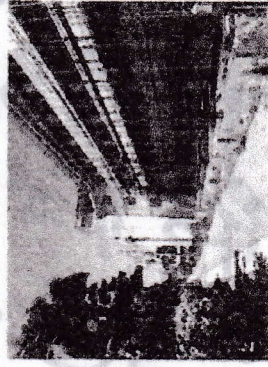
昭19年に新潟市鉄工組合が解散するので、その建物や機械器具を新潟市が譲り受けることが出来るようになりました。戦時中の物資が不足する中でしたが校舎の着工にこぎ着けました。しかし、文部省の認可が遅れて翌年昭20年3月に「新潟市立工業学校」として開校しました。

当所、生徒50名、教職員13名でスタート。終戦・戦後の混乱と厳しい時代にも生徒達は元気に成長し、昭23年には「新潟市立工業高等学校」と改称し、定時制課程も



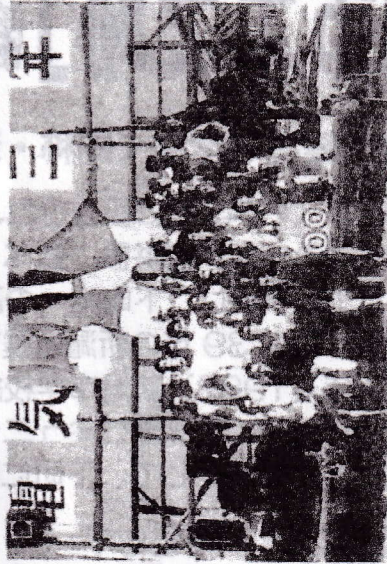
置き、機械科2学級で発足。昭24年、物資の不足はまだまだ続き、一般家庭でも配給生活も残り、この年生まれの母子手帳には、粉ミルクや砂糖の配給の記録がありました。そんな中、国立倉庫を移転改装し、体育館が出来ました。

昭25年、造船科を設置し「巻町にいがたらしい特色を出し、昭26年には「校歌」も出され、古村作の校舎、体育館が完成したが、生徒達の意気はヒカヒカで、後の



高度成長を支える熱気もつくり上げた学校だったと伺われます。また、定時制の生徒が夜遅くまで勉強していた姿は、所に元気を与え続けました。

地域と共に歩んで来た工業高校に子供達の目標が、ほととも興味深く、何でも出来るお兄さんかのように映りました。旋盤・溶接の実習は面白く中でも鍛造は、暗い所で赤い鉄が流れる様子は花火のようで見ている飽きがきません。近くに行くと叱られますので遠くから覗いた事が思い出されます。主に自動車部という部活もあり、エンジ音を鳴り響かせエンジンやフレーム、四輪の仕組みを採る生徒達。時代もくっついていく人達だなあと思えました。



昭34年には電気科も設置され、昭35年には改築校舎が完成し、古村木造校舎から鉄筋校舎へと変わりました。昭和30年代の生徒で電気科卒業の久保田光佳さんは「グラウンドがおかつた」

北部グラウンドで運動会をして、応援席のパネル作りでは、足場田の丸太を組んで立ち上げ本職並みに作り、応援用のスピーカーは本部より大音量のものを電気科の技術で付けてやったよ。在校生も県内各地から集まり活気にあふれ、遠くは津川からも通っていたよ。昭和の活気ある下町を作り上げ、地域産業の技術者を育て人づくりも担った高校は、昭37年に白山高校と統合し、後、高志高校として移転。思い出を託しました。